

世界自然遺産・知床の持続可能な観光を考え合う学び

—北海道知床ウトロ義務教育学校での出前授業をもとにして—

Learnings from Discussions about Sustainable Tourism in Shiretoko, a World Natural Heritage Site: Based on Classes by Visiting Teachers at the Shiretoko UTORO Compulsory Education School in Hokkaido

寺本 潔

Kiyoshi Teramoto

I はじめに

世界自然遺産に登録されている北海道知床半島に位置する知床ウトロ義務教育学校では、ユニークな環境教育が行われている。知床観光の中心地であるウトロ地区の斜里町立知床ウトロ義務教育学校において、9年間を見通した知床学習のカリキュラムが運用されている。知床の自然環境を守りつつ、いかに住民や観光客にとって望ましい観光の在り方を実現するか、持続可能な観光を考え合う授業が展開されている。筆者は、学校の取材も兼ね2020年11月初旬に斜里町立知床ウトロ義務教育学校を訪問し、次世代を担う子どもたちの学びを手助けする出前授業や授業後協議会を開催した。本稿は、その際に行った授業内容を報告するものである。

1. 地域の地理的概要と観光

北海道知床地区は、生物多様性が感じられる自然豊かなエリアとして有名である。行政地区としては斜里町と羅臼町にまたがる半島で、北端の知床岬から南に伸びる半島の付け根に位置する斜里町役場までの距離はおおよそ71.4kmある。また、半島の東側に位置する羅臼町役場までの基部の幅（東西距離）は25kmであり、知床半島は羅臼岳（標高1661m）を中心にオホーツク海に鋭く突き出た地形となっている。積雪量は多くないが冬の寒さは厳しく、地形の制約もあり開発の手が及びにくかったため、豊かな自然が残っている。斜里町の人口は、11300人（令和2年12月末）であり、羅臼町は4911人（令和2年11月末）である。斜里町ウトロ地区は、知床観光の中心地であり、夏場に多くの観光客が手つかずの自然を求めて訪れている。ヒグマやキタキツネ、エゾシカ、オジロワシ、シマフクロウなどの野生動物にも出会え、知床五湖やフレベの滝を中心にトドマツやエゾマツなどの林に加え、ミズナラやカツラの大きな木も生え豊かな植生と美しい景観に魅せられた年間30万人の観光客が当地を訪れている（知床国立公園1964年指定、世界自然遺産2005年登録）。夏場だけでなく冬期には流水観光も楽しめ、また温泉も湧き出ることから、遊覧船や漁船の出入りする港や道の駅、バスターミナルも整備されている。宿泊施設としても民宿から中小のホテルや大型ホテルまで林立している。

旅行代理店店頭にある知床旅行パンフレット（エースJTB、2020年6月1日～10月29日発）「エンジョイ知床」を開いてみると「美しい自然と野生動物の宝庫として名高い知床は、世界自然遺産に登録されて約15年。大自然の絶景が楽しめる人気エリア。トレッキング・ガイドツアーなどの自然アクティビティや野生動物に出会えるクルージング、近郊の歴史や文化が学べる博物館など“知床をじっくりたっぷり”満喫する旅にでかけよう！」とリード文で解説されている。広域MAPには「知床の約束」と題し「野生動物を見

かけた時、美しい農村景観を見かけた時の約束です。知床の自然を守るため、約束は守りましょう。・畑や牧草地には入らない。・決められた駐車場に車を停める。・ヒグマや野生動物にえさを与えない。」も記され、自然保護への啓発がなされている。旅行パンフレットには14コースに及ぶ知床ガイドツアー・アクティビティも掲載され、「知床五湖ガイドツアー」や「絶景！知床けもの道ガイドウォーク」「知床断崖シーカヤック」「知床ナイトサファリ」など豊かな自然を満喫できる旅行商品が生み出されている。

世界自然遺産登録後は多くのマイカーや団体観光バスがこの地区に入り込み、マイカーによる知床五湖地区への入込客は夏場だけでも5万人と推察されている。統計的には斜里町全体への入込客数は116万6千人（令和元年1月～12月、役場統計による）にも達している。

最大の懸念される点は、観光客のヒグマへの接近による危険である。マイカーやバイクを止めてヒグマを撮影し、餌やりや食品、包装ごみの廃棄によるヒグマへの影響が問題となっている。ヒグマや鹿、キタキツネなどの野生動物が至近距離で撮影できる地点では、渋滞も生じるようになっている。こうした観光客との間で生じる環境負荷は無視できない事態になってきており、シャトルバスの利用（現時点では10月に10日間実施）促進をはじめ、入込自体の制限や許可制による個人客の指定ゾーンへの立入、マイカー規制などの制約をいかに設けるかが議論されている。

一方で観光客増加により、宿泊費やレンタカー使用、各種消費金額の増加は収益増をもたらし、多くの雇用を地元で生み出しているのも事実である。知床五湖エリアへの入口に位置するウトロ地区には、宿泊施設やレストラン、土産店、ガソリンスタンド、レンタカー会社、コンビニ、道の駅、世界遺産センターなどが立地し、生活に便利な都市的施設に恵まれている。教育施設として地元で高校はないものの、小中学校が合同の校舎で義務教育学校として運営されている。

2. ESDに立脚する観光教育

本稿は、世界自然遺産地区で有名な知床に生活する児童生徒が、持続可能な開発のための教育（ESD）を題材に、観光や開発を絡めてどのような学習を行っているかを実地で調べ、さらに観光教育の専門家として筆者自身による出前授業や教員向け協議会を学校に受け入れて頂き、教育実践を通して一定の貢献を果たした結果を報告するものである。寺本（2019）で報告したようにESDについては、ようやくその用語の意味が一般に理解されるようになったものの、教育界での授業実践の広がりや深まりは未だ十分とは言えない現状がある。英語やプログラミング教育、特別の教科・道徳、国語と算数（数学）の基礎学力向上などからの要請に比べ、優先順位がそれほど高くないのもESDの進展が遅々として進まない背景にある。さらに、SDGs（持続可能な開発目標）という用語への移行も進みつつあり、ESDとSDGsの関係性さえ曖昧な認識の教員がいるのも事実である。観光教育というジャンルに至っては寺本・澤（2016）や内川・佐藤（2019；2020）、寺本（2019；2020）などの社会科からの研究視点を始め、観光庁制作動画「観光教育ノススメ」（25分間）が啓発のために貢献しつつあるが、未だ教育界で認知されたと呼べるような状況には至っていない。むしろ、2020年から続くコロナ禍の影響も相俟って、観光というワードが自粛というワードに絡め取られ、いわば悪者扱いされ教育界の話題にのぼることすら無くなりつつある。

しかし、人口減少や高齢化、地域産業の衰退が続く地方にあって、観光振興は地域に活力と誇りを取り戻す起死回生の方策として期待され、「持続可能な社会の創り手」を育成する教育方法としても重要性を増しているのではないだろうか。目下、日本各地では地域資源に目を向け、都会との交流人口増をねらった各種イベントやDMO（従来の観光協会が再編成された広域の観光振興を目的とした組織）が構築され、地元と観光客との関係性を強化する動きがある。今後は、知床ウトロ地区だけでなく、斜里町全体においても地元の児童生徒自身に持続可能な観光の創り手として成長してほしい期待を高めていく必要がある。

ESDに立脚する観光教育は同時に「ふるさと教育」や「キャリア教育」にも関連し、魅力的なコンテンツを有する観光情報はICTの活用とも親和性がある。中学や高等学校に至ってはSDGs思考も絡めつつ、地

域資源を活かした観光商品の企画立案や観光ガイド養成、ホスピタリティ精神の涵養などを目的に「総合的な学習（探究）の時間」の恰好の題材として観光事象が選ばれるケースがコロナ禍前は多く見られた。したがって、コロナ禍により、頓挫しかけている観光教育の再興ムードを高めていく必要がある。

II 知床財団（知床自然センター）による教育貢献

知床五湖地区で来訪者に向けて広報活動を行っている団体が、知床財団（知床自然センター内）である。当財団から発行されている『ANNUAL REPORT 2019』によれば、財団は地元、斜里町や羅臼町、北海道、国（環境省・林野庁）、民間からの事業委託金や寄附金、会費などからなる公的な資金で運営されており、2019年度の経常収益は3億5908万円となっている。森林再生やヒグマの生息実態調査、エゾシカ個体数調査などが主な委託事業である。民間法人からの寄附ではダイキン工業（株）からの500万円の寄附が最大で決してゆとりある財政状況ではないことが分かる。賛助会員の総会員数も1879件にとどまっており、さらなる拡大が期待される。年間では様々な活動が行われているが、この内、児童生徒学生等を対象にした環境教育に関しては次のような活動が目される。

地元学校でのクマ授業（5月）、知床自然教室（8月）、北海道大学獣医学部・酪農学園大学実習受け入れ（9月）、しれとこ産業まつりイベント出展（9月）、森づくりワークキャンプ（11月）、知床流水フェスでナイトウォーク実施（2月）のうち、5月に実施されている地元学校というのが、知床ウトロ義務教育学校における出前講座である。動画資料を拝見したが、ウトロ義務教育学校に財団職員が出向いてヒグマやそのほかの野生動物のぬいぐるみを活用した野生動物と人間活動との関係性を問いかける授業や知床の自然環境保全と観光客増加による諸問題などの解説を行っているようである。8月に実施されている「知床自然教室」は、児童が親元を離れて1週間もの間ヒグマの暮らす森で寝泊まりする事業で、地元だけに限らず、全国から参加者が集まるユニークな事業である。既に40回目を迎え、子供時代にこの教室に参加した者が財団で働くきっかけをつくった事例もあるそうだ。ポンホロという土地での人とヒグマの付き合い方について身を持って体験できる優れた環境教育となっている。

さらに、京都生まれの「あかし のぶこ」というペンネームで知床に魅せられた女性が描いた絵本『しれとこのきょうだいヒグマ ヌブとカナのおはなし』は、観光客が持ち込んだお菓子の味を覚えたヒグマが人里に出没し、射殺されるという悲しい結末となっており、ESDに立脚した観光教育としても優れた教材として注目される。また、自然センター内の展示物でもヒグマとの付き合い方を丁寧に解説したパネルがあっ



写真1 ヒグマの生態に関する解説板（筆者撮影、以下同じ）掲示

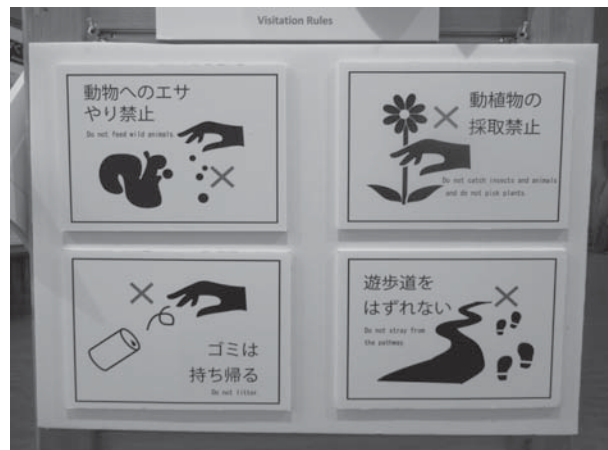


写真2 野生動物への対処を訪問客に呼びかける

た（写真1・2）。

Ⅲ 斜里町立知床ウトロ義務教育学校における知床学習カリキュラム

1. 総合的な学習（探究）の時間と課題の設定

コロナ禍の拡大と共に文部科学省では、「生活科・総合的な学習（探究）の時間の指導におけるICTの活用について」を発表し、時間と空間を超えた新たな学びとして、オンラインの活用を打ち出している。地域の課題に接近する「総合的な学習（探究）の時間」（以下、総合学習と略記）の展開にとり、対面での授業場面に制約を設けることは、学習効果の面で懸念されるものの、工夫次第ではある程度の成果をあげることもできる。

総合学習は、一般に、課題の設定（実社会の問題状況や児童の興味・関心に基づく課題等の設定など）⇒情報の収集（文献検索、ネット検索、インタビュー、アンケート等で収集など）⇒整理・分析（統計による分析、思考ツール等で分析など）⇒まとめ・表現（プレゼンテーション、ポスターセッション、提言、論文作成等で発信など）という流れで指導することとなっているが、その課題の設定について知床地区ではどのような工夫がみられるであろうか。

文科省・国立教育政策研究所から公表されている教育実践に結びつく展開例を参照すれば、探究の高度化と題し、「課題の設定」では例示として「ネットの動画などから国内外の課題を設定、デジタルカメラ等で記録した地域の学習対象の画像や動画から課題を設定、集めて蓄えた情報を見つめることで課題を設定するなどが考えられる。その際、人や社会、自然に直接関わる活動を充実させて子供の興味・関心を喚起し、リアルな体験とバーチャルな活動とを融合しながら学習を構成していく。このような学びがSteam、SDGs、地域活性化など、現代的な課題の設定と結びつく。」と記されている。

つまり、ネットやデジタルカメラで記録した地域課題の画像情報を課題設定の導入で使うことが推奨されている。知床地区の地域課題に関してはどのような題材が選ばれているのだろうか。次に、知床学習と銘打って系統化されているカリキュラム表を検討してみたい。

2. 知床ウトロ義務教育学校における総合学習のカリキュラム

当校では、ホームページにも紹介されているが、9年間に及ぶ知床学習カリキュラムが公開されている（写真3・4）。このカリキュラムの特色は、一人の総合学習担当の教諭によって原案が構想され、実施されてい



写真3 廊下に掲示されている知床学習の授業風景

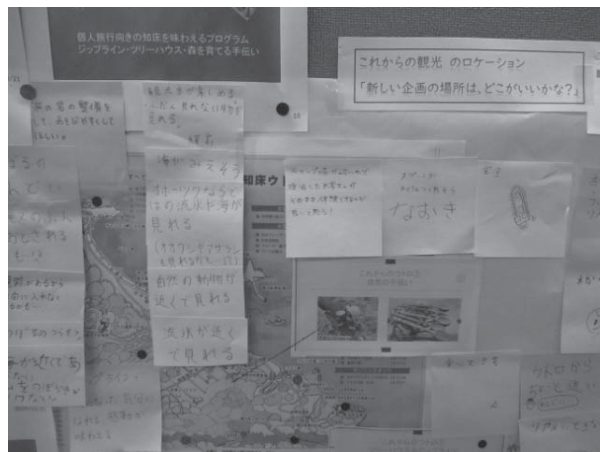


写真4 これからの観光振興をウトロ地区のどこで実施できるかを地図上で思考

る点に大きな特色がある。各学年の児童生徒数が数名から10名前後であるため、フレキシビリティに運営できる利点もあり、一人の総合学習担当教諭の裁量が大きい点が利点と言えよう。

表1 令和2年度 知床ウトロ義務教育学校 総合的な学習の時間 計画一覧

学年・学習課題	3 (70時間)	4 (70時間)	5 (70時間)	6 (70時間)	7 (50時間)	8 (70時間)	9 (70時間)
各学年の目標	地域の自然や生活、歴史について探究する学習を通して、粘り強く課題を解決していくための資質・能力を育成する。		地域の人々や産業、歴史などについて探究する学習を通して習得した知識・技能を働かせながら課題を解決していくための資質・能力を育成する。			世界自然遺産や将来への展望などについて探究する学習を通して社会や自然との関わりにおいて自らの生活や行動を考えるための資質・能力を育成する。	
知床学習のテーマ	知床の自然	知床の生活・歴史	知床の人々と産業	共生①	共生②	世界から見た自分たち	知床の未来をつくろう
ふるさと知床学習(自然環境・町づくり・地域経済・産業・伝統文化・国際理解)	総合的な学習ガイダンス10h 学校周辺の草花 ・学校周辺調査 じまんのチャシコツ27h ・磯体験 *斜里町博物館協力	ウトロの歴史35h ・江戸時代までのウトロ ・岩尾別開拓 ・100平方メートル運動 わたしたちのよさこい10h ・よさこいについて 安心安全の町を目ざして25h	羅臼小との交流2h 観光地としての知床12h ・観光の現状と課題を知る *観光協会・知床財団・道の駅協力 産業で支える知床37h ・孵化場見学 産業から見た知床8h	羅臼小との交流10h オホーツクの歴史と文化36h ・アイヌ文化 ・修学旅行での体験 *阿寒アイヌシアター 観光地としての知床24h ・PR活動	世界自然遺産・知床の現状と課題24h ・ウトロ地区見学SDGsを知ろう2h ①外国人との共生を考えよう12h ・ひょうたんじま問題	ヒグマとの共生10h ・1、2年生に向けてのヒグマレクチャー ・共生のアイデアSDGsを知ろう ②2h世界の環境問題、貧困や紛争と私たち16h ・開発教育 ・パーム畑の話	知床のよさと課題26h ・8年間の学習のまとめ ・札幌地域の学校と交流 知床の森体験8h 知床の未来16h ・課題ごとに解決策をつくる ・似た地域の先進事例調査
未来探究学習のテーマ	学校内のあこがれの先輩15h	ウトロの歴史35h	お仕事の種類～未来無限大～8h	オホーツクの歴史36h	職業や勤労について学ぶ12h	職場体験学習42h	進路について・上級学校と職場訪問20h
未来探究学習(キャリア教育)	・学校の先輩について ・インタビュー	・地域の方へのインタビュー ・昔と今との違い	・自分の興味のある職業や分野について調べる	・昔と今の違いから歴史を学ぶ意味を考える	・働く意義を考える ・8年生の職場体験を聞く	・体験訪問 ・ウトロ2日 ・斜里町内2日	・修学旅行 ・斜里高校オープンスクール
多面的・総合的	チャシコツの良さや課題	アイヌ文化を総合的に	持続可能な農業を考える	文化の違いを尊重	多文化共生理解	ヒグマとの共生	将来のふるさとを多面的に

注) 斜里町立知床ウトロ義務教育学校のホームページより作成。実際の表には生活科や教科との関連も配置されているが、スペースの関係で寺本が一部簡略・省略した部分もある。「ふるさと知床学習」のテーマ及び未来探究学習の欄には、SDGsのロゴマークも貼り付けられているが省略した。

表1は当校の総合学習(知床学習)のカリキュラムである。この表から分かることは、必ず地元にある各種施設(図書館、ホテル、孵化場、自然センター)や自然体験の場所(チャシコツ海岸、岬上遺跡)、在住外国人などのリアルな訪問先を組み込んでいる点にある。単に、学年ごとに設定したテーマを机上で学ぶだけでなく、積極的に訪問や調査、観察を展開している点にある。教科との関連もしっかりと押さえられ、場当たり的な学習単元は組まれていない。また、7学年以上にはSDGsが重要な探究テーマとして据えられ、世界の環境問題という視野から、知床で暮らす自分たちの生き方に迫る内容となっている。8・9学年の目標も「世界自然遺産や将来への展望などについて探究する学習を通して、社会や自然との関わりにおいて自

らの生活や行動を考えるために資質・能力を育成する。」とされ明確化されている。当学校の廊下には、知床学習の内容を伝える掲示資料がたくさん貼ってあった。それによると学級規模が少人数であるメリットを最大限に生かし積極的にウトロ地区へ出かけ、地域課題に関するリアルな場面との出会わせや、画像情報を蓄積し、自然や社会事象との直接的な体験から学ぶという経験学習が展開されていることが伝わってくる。一人一人の考えを伝え合う場面や、考えを深めていく指導を丁寧に施す教育が行われている点は注目される。

IV 筆者による出前授業の概要

第6学年児童(10名)に対して2020年11月に寺本による2時間の出前授業を公開授業研究会の形で行った。知床地区の観光資源に関する知識の整理(観光の花びら)と「観光地名+動詞=楽しみ方」という観光客目線に立って観光プログラムを立案する学習を1コマ実施し、その後で知床地区の観光の強みと弱み、機会と怖れの4項目をSWOT分析の思考ツールで整理する考え合う授業を1コマ行った。授業記録を詳細に掲載する紙面のゆとりがないので、前半は授業の概略を、後半はSWOT分析の発表シーンの発言記録を掲載したい。

1. 観光の花びら

地域の観光資源を分類する方法はいくつかあるが、筆者は6つの分類指標を「花びら」というネーミングで取りまとめるようにしている。その6つとは、「自然」「食」「歴史」「生活文化」「施設」「イベント・祭り」の6つである。知床ウトロ義務教育学校6年児童の口からは、知床五湖、鮭、アイス、流水ウォーク、サケテラス(港に建設されているサケの水揚げを見下ろせる屋根型の広場)、夕日が見えること、きたこぶし、クリオネ、波しぶきのラーメンなどが飛び出してきたものの、生活文化やイベントに関しては客観視しづらかったようだ。一般に、当該地域に住む人々は、他と比べて自分の町がどういった点で固有の価値があるのかを掴んでいない場合がある。日常目にしていないものが、他者目線で見ると価値あるものである点になかなか気づかないものである。そこに、観光教育の意義がある。

2. SWOT分析

SWOT分析とは経営学でしばしば使われる視点で経営主体の強みと弱み、機会(チャンス)と怖れ(心配)の観点から点検する方法である。これを観光地経営に当てはめて当該地域に住む児童生徒に考えてもらう視点として提示した。一般に、「強み」に関しては観光地に住む児童は、すぐに回答できる。世界自然遺産地区の価値については繰り返し大人たちから伝えられてきているからである。しかし、「弱み」に関しては、我が子に知らせたくない、否定的な側面や観光地としての弱点なので曖昧にしておきたいとの意思が地域に見られることが多い。また、「機会(チャンス)」に関しては、時代的な要請やトレンド、話題性などタイムリーな要素が多いため、社会の情報に敏感でない児童の場合には思いつかない問いかもしれない。さらに「怖れ(心配)」は、人里へのヒグマの出没や観光客と野生動物との接点、交通事故などはすぐに思いつくが、観光地間の競合や観光入込客の動向などへの予測はなかなかできない。しかし、今後の観光教育の進展を考える上で、単にお国自慢的な「強み」意識の上塗りに終始しても思考力は高まらない。小学校児童にとっては発達段階から安易に地域の「強み」や「よさ」を強調するだけの学習は却って、中学校に上がった後に、現実的な課題の大きさに愕然としがちになるからである。

例えば、当校の児童の中には大型ホテル・旅館の御子息や御令嬢が通っている場合も多く、新型コロナ拡大によるホテルや旅館の経営難や大型化したゆえのランニングコストの増大による経営の悪化など、現実的な課題に関しては等閑視せざるを得ない現実もある。我が国の観光地にある宿泊業の多くが抱えている問題でもあり、持続可能な観光を考え合う上での学習問題としても今後の検討を要する課題であろう。つまり、持続可能な観光教育は、単に自然保護だけに特化した内容を学ぶ環境教育でなく、いかに観光地としての持

統的な経営を遂行し、自然環境の保全はもとより、当該地域の観光価値を高め、多くの訪問者が観光を通してSDGsを自分に引き寄せて観光事象に参加・参画していく地球市民としての資質・能力を養っていきけるかが問われているわけである。

表2 知床の観光をSWOTで分析した結果（6年生10名の付箋に記入された意見）

知床の観光面での強み S	知床の観光面での弱み W
<ul style="list-style-type: none"> ・知床の自然（森、流水）や動物がいる。 ・絶滅危惧種のシマフクロウや本州にはいないヒグマがいる。 ・ホテルから海、夕日、木が見える。 ・地元の人とふれ合う機会が多い。 ・鮭が日本一とれるところだから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子供が楽しめるようなものが少ない（テーマパークなど）。 ・天候や季節に左右される。 ・建築物や人口が少ないこと（にぎわいが無い）。 ・店や病院が少ない。
知床をとりまく機会（チャンス） O	知床観光の心配や怖れ T
<ul style="list-style-type: none"> ・森林伐採が増えているので今まで以上に都会から森林を求めて来る人が増えるかもしれない。 ・テレビ局が知床に来た時。 ・GO TO トラベル。コロナで国内旅行が増えている。 ・テレビでの放送。 ・新鮮な魚を求めて観光客が増える。 ・今！世界遺産登録から15年目。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観光客がゴミを捨て、それを動物が食べてしまうこと。 ・鮭の漁獲量が減って知名度が低下するかもしれない。 ・シーズンによって観光客が増えたり減ったりする。ホテルなどを作ることで自然はかくなる。 ・クマやシカが町に出てこないか。 ・動物から人への感せん。原生林が減る。ポイ捨て。地球温暖化。

3. 授業記録

この授業記録は筆者の出前授業参観のために同行された日本女子大学の田部俊充教授が録画記録をとり、それを指導学生である稲垣朋香さんにテープ起こししてもらったデータから採録したものである。一時間目は「観光の花びら」という6つの視点で知床の魅力を書き出す作業と後半は、二人ひと組になって旅行者のタイプ（熟年夫婦やハネムーン客、女子大生、ファミリー客などの6種）ごとに、どのような旅行商品が適しているかを二軸の紙面に配置するポジショニング・マップ作業を愉しんでもらった。二時間目は知床観光を経営的な視点から点検するSWOT分析を実施した。合計二コマの授業記録は長文に亘るため、二時間目のSWOT分析を扱った場面のみを紹介する（写真5）。

資料1 第6学年 観光授業（2020年11月4日5限）発言記録

於、知床ウトロ義務教育学校6年学級（児童数10名） 授業者 寺本潔

発言 T：授業者 C：児童

T：知床の観光をSWOTで分析しよう。6年生の11月の段階だから、考える力は身につけているよね。だから、出来るはずです。SWOTというのは、大人の会社経営している人とか、大学で経営学部の人が時々考える方法です。SWOTのSはStrengthといって、「強み」という意味です。知床の観光の強みは何と言ってもこれだよっていうのを、白い付箋に横書きして下さい。ほかにない「強み」はこれじゃないかなっていうのを考え付いたら書いて下さい。

一方、知床観光面での「弱み」。ウィークネス（Weakness）のWには、「ここが弱いんだよね知床観光は……」、と思うものを書いて下さい。おじさんはウトロに来たのは二度目ですが、以前来た時は8月の下旬

でした。季節が違ふとこんなに違ふのかと思いました。「弱み」と関係があるかもしれないね。三つ目は、知床を取り巻く機会（チャンス）でOpportunityのO っいいいます。これは知床の観光を盛り上げるチャンスかもしれないことを考えてほしいです。知床は2005年にある登録を受けたんだよね。世界に自慢できるものを。それ以降も色々なチャンスがあるかもしれない。そんなアイデアを書いてみて下さい。最後のTは、知床観光の心配や怖れがThreat（脅威）という英語で頭文字をとってTといいいます。新型コロナ感染症も確かに心配だよね。ウトロの温泉街にクラスターが発生したらどうしようっていう心配もあるよね。それ以外の心配も書いていいです。最低でも、付箋に一人一枚ずつ、4つの観点を考え付いてくれたら嬉しいですよ。二人で相談しながら書いてもいいですよ。

(10分後)

T: それでは発表して下さい。スタート!

C: 強みは、流水があること。流水の上を歩けるのは魅力だと思う。

C: 野生の熊がいる。ホテルもたくさんある。ホテルから必ず海が見えるのも強みかな。

C: 絶滅危惧種もたくさんいるよね。

C: 釣りができるところが多い。どこでもできるよね。

T: 今度、ホテルがまたできるんだって?

C: あそこにあまり作ってほしくないなあ。

T: どうして?

C: 自然が破壊される。

C: ほかの心配ごとはゴミを海の動物が食べてしまうことです。

C: 観光面での「強み」は野生の熊に会えること。鮭が日本一獲れる。観光面での「弱み」は子どもが楽しめるところが少ない。天気にも左右される。知床を取り巻く機会は、テレビ取材してくれることがチャンスかな。コロナが流行って国内旅行の方が増えているから。心配や怖れは、熊が街にやっこないかということと、観光客が減ること。

T: 次の発表者どうぞ。

C: 知床観光の「強み」は世界にない流水を楽しめることと鮭が多く獲れること。「弱み」は歩道の整備ができていないことと、お店や病院が少ないこと、歩いたら楽しめるけど、遊んで楽しめるところが少ない。知床を取り巻く機会は、テレビでの放送と動物との触れ合い。心配や怖れは、動物から人への感染。原生林が減ることとごみのポイ捨てです。

T: 次の発表者どうぞ。

C: 知床観光での「強み」は自然や他の所ではあまり見ることができない動物が見れること。「弱み」は子どもが楽しめるようなテーマパークがないこと。知床を取り巻く機会は、新鮮な魚やお店を求めて観光客が増えること。都会では森林伐採が増えているから、今まで以上に森林を求めて来る人が増える。心配や怖れは、観光客がゴミを捨ててそれを動物が食べてしまうこと。鮭の漁獲量が減ってしまい、知名度が低くなってしまふかもしれないことです。

T: 有難う。では次の発表者どうぞ。

C: 知床観光面での「強み」は自然を自分で探ることが出来ること。絶滅危惧種のシマフクロウや本州にはいないヒグマがいること。「弱み」は建築物や人口が少なく賑わいが少ないこと。天候にも左右されることです。

T: 次の発表をお願いします。

C: 知床観光の「強み」は四季がはっきりしていることとホテルから海、夕日や木が見れること。釣りが出来る場所が多いことです。「弱み」は建物を建てるほど自然を壊す原因になることです。機会は知床世界自然遺産登録15年経った今とGO TO トラベルの今です。心配や怖れは、動物が減ってしまうことと地球温暖化です。

T：漁獲量が減ってしまっているんですか？

C：温暖化で海のプランクトンが増えすぎたり、気温が高くなると流水が減ってきたりするから。

T：担任の渡辺先生から御感想をお願いします。

(担任)：温暖化とかいろいろなことを知っていることにびっくりしました。自分の思っていることを表すことが出来ること、自分の持っている知識を使いながらやることが素晴らしいなって思います。90点です。

(斜里高校教諭)：皆さんは小学6年生ですよ。自分の住んでいるところをしっかりと見て感じているんだっていうのを授業を見て感じました。私は、観光客に自分の地域をおススメするには、自分たちの住んでいる町を良く知っておくことが大切だなと思っていて、高校生にその視点をベースにして授業をおこなっています。ただ、高校生でも君たちみたいに自分の町を分析して、何が課題なんだろう、何がよいところなんだろうってなかなか言えないです。

T：たくさん人が観光で知床に来ていていろいろな問題が起きていますが、それを未然に防ぎながら、ある程度は人が来てくれないとお仕事生まれません。観光のお仕事皆さんの将来就くお仕事になるかもしれない。お仕事が少なくなると札幌市に若い人がどんどん出ていくんですね。これは少し問題です。素晴らしい知床をよく理解して、少しでも地元を盛り上げていって下さいね。

「新しい知床観光をPRするフレーズを考えよう」と題し、最後に各人、一行で表現してもらった。以下に、示す。

「自然センターのスクリーンで知床の季節を味わおう」「オロンコ岩で二百段弱上り切ると絶景がまっている」「天に続く道のでっぺんで見る海、木、夕日」「カムイワッカの滝でぬくもるもよし、上からながめを見るもよし」「ドライブで森にひそむ野鳥探し」「知床の温泉 海と夕日でリラックス」「流水ウォークで犬になる」「知床で船に乗って望遠レンズで熊にあいさつ」「乙女の裏で一人悲しむ男の涙」「波飛沫の今月のラーメンを食べることができます」

4. 多角的な思考を促す観光学習と世界自然遺産学習

国立公園や世界自然遺産を有する地区に住む児童生徒にとって、自然環境は貴重なものであるとの観点から、最初から保全を前提にした思考にとどまりがちになる。そのため、一切の開発行為や観光振興策を全否定する狭い見方・考え方にとられる懸念も生じる。国立公園法によって確かに開発には強い規制がかけられてはいるものの、開発と保全の関係性を思考する学習機会を失ってはならない。むしろ、国立公園に指定された経緯や世界自然遺産に登録された要件をしっかりと学び、長い歴史の中で先人がいかに努力して環境を保全してきたのかを実証的に学ぶ機会にすべきである。

例えば、鹿児島県屋久島は世界自然遺産地区として有名であるが、屋久島の森林伐採の歴史を調べてみれば、開発と保全のせめぎ合いでいかに先人や地域が模索してきたのかを知ることが出来る。決して、屋久島は世界自然遺産登録以前より縄文杉だけが生えた原生林の秘峡ではなかったことを知ることは大事である。



写真5 知床観光をテーマに考えたSWOT分析を発表する児童
注) 写真の背景に映っている黒板は筆者による出前授業の板書

知床半島の場合も斜里町の「しれとこ100平方メートル運動」(1977年に知床国立公園内の開拓跡地を乱開発から守るため、全国に土地買い取りを呼びかけ、1997年には参加者49024人、寄付金額5億2253万円を達成し、現在は森を育てるトラストとして運用中)を学習材としても振り返ることが、重要である。さらに、NHKで放映された半島の中中部にあるルシャと呼ばれる地区にある小屋(ウトロ港と知床岬の中間に位置するヒグマの聖地・ルシャ湾にある漁場)での人とヒグマの関係を事例に野生動物との付き合い方を考え合うことも環境教育として有効であろう。

実際、ウトロ地区から50kmほど南下した斜里町にある斜里中学校では、知床巡検と称した現地見学会を5月に実施している(1年89名、引率教員6名、博物館やネイチャーガイド数名)。遊覧船を使いウトロ港～カシュニの滝までの間の観察とルシャ地区でのヒグマを観察している。

斜里町教育委員会に報告された巡検記録によると「ルシャ地区に入ると、浜を走る単独のヒグマが1頭と少し離れてもう1頭のヒグマが観察された。いずれも雌の成獣クラスの大きさで、浜を走っていた個体が岩の上に上ると生徒から歓声があがった。(中略)また、テッパンベツ川右岸に親子のヒグマが1組おり、おそらく1歳の子供を連れていた。どの個体も草木などを採食しているようで、船内ではこの時期のヒグマの食べ物などについての解説がなされた。(中略)ヒグマは6頭と昨年より多く観察できた。一方で野鳥の個体数が例年より少なく感じられ、特にウトウが見られなかった。乗船したガイドから世界自然遺産として評価された知床の生態系や野生動物たちの解説をしっかりと聞いており、理解が深まったものと思われる。」と報告されている。このようにウトロ地区に住んでいない生徒にとっても一定の知床学習が行政機関により実施されている点は高く評価できる。

さらに、ウトロ地区で顕著にみられるホテル建設や観光施設の事例をもとに、観光振興による地域経済と貴重な自然環境の保全との両立や人里に出没する野生動物との付き合い方、アイヌの古代集落跡から自然の中で生活することの意味を再考する学びなど世界自然遺産地区に相応しい学びは多くある。近年、重要視されるSDGsを題材にした教育についてもエネルギー使用(開発目標7)、つくる責任つかう責任(開発目標12)や海や陸の豊かさ(開発目標14・15)、パートナーシップ(開発目標17)などを考える題材が典型事例として見出せるのも世界自然遺産地区ならではの特色になるだろう。

V おわりに

知床ウトロ義務教育学校における総合学習を事例に、環境保全を指向した観光教育の在り方(Sustainable Tourism)を論じてきた。観光という事象は、ホスト(地元民)とゲスト(観光客)の相互交流により、持続可能な開発の在り方を多角的に思考する機会を提供するため、教育においても地元目線だけにとらわれず、積極的に観光客目線を意識する教育(観光教育)を展開すべきではないだろうか。本稿で紹介した「観光の花びら」やSWOT分析は、その目線を次世代が意識する場面になる。自分たちが住む地区が、いかに観光客から注目されているかを知り、観光客のニーズに応える営みの重要性に気づくと共に、ともすれば入込客数の増加に重きを置いて指向しがちな観光行政の振興策や地元住民の意識に対し、知床固有の自然を未来に引き継ぐために一定の入込制限や観光客への事前の環境教育の徹底、観光客が入れるエリアとそうでないエリアを厳しく区別するゾーニング、観光客から徴収する特別税の可否など、多角的に思考し探究できる学習材は多い。今後、ワクチン接種の普及により、新型コロナが一定の収束を迎えるに至り、観光が再興され様々な振興策が叫ばれ、急速に入込客の増加が予想されるが、いかにして「持続可能な観光の創り手」として観光地に住む児童生徒を育てていけるかが、全国の観光地に課せられている。コロナ以前の姿に安易に戻ればよしとするのではなく、世界的な課題であるSDGsを組み込んだESDに立脚した観光教育の構築と実践を展開する時代に入っている。国内的には地方の活性化と持続的な観光の推進は待ったなしの課題ではないだろうか。都市から地方への活発な交流機会を増やし、都市住民が第二の故郷として地方を感じたり、地方に住

む者も地域の固有性に気付き、都市からの観光客を招く方策を考えたりすることのできる資質が期待される。2020年度より観光庁内に「初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会」が発足し、筆者も委員の一人として参画しているが、今後、観光地に近接する小学校だけでなく、中学校や高等学校レベルでの具体的な観光学習のプログラム開発と理論的な検討が期待される場所である。

末尾になったが、出前授業の様子を地元の新聞社が報道してくれたので資料2に掲載したい。

資料2 北海道新聞に報道された出前授業の様子



出典：北海道新聞地域版（2020年11月8日朝刊記事より）

謝辞

本稿を作成するに当たり、筆者の出前授業を設定して頂いた北海道教育委員会の河端香代子義務教育課長（当時）並びに受け入れて頂いた知床ウトロ義務教育学校校長並びに教頭の先生方にお礼申し上げたい。とりわけ、総合学習担当の渡邊圭先生（現・教頭）には、その後に中学3年生への遠隔授業でも関与させて頂いた。深く感謝致します。さらに授業の様子を撮影して頂いた日本女子大学の田部俊充教授とその文字化を通して卒論としてまとめて頂いた同大学学生の稲垣朋香さん、ヒアリングに応じて頂いた知床自然センターや世界遺産センターのスタッフの方々にもお礼申し上げたい。今回の調査は文部科学省科学研究費基盤研究「ESDに立脚する小中高一貫した観光教育のカリキュラムの構築」（研究代表：寺本潔）を活用した。

【参考文献】（発表順）

- あかしのぶこ（2008）：『しれとこのきょうだいヒグマ ヌブとカナのおはなし』知床財団、全48p。
 佐藤真久・阿部治編著（2012）：『ESD入門—持続可能な開発のための教育—』筑波書房、全255p。

-
- 寺本潔（2015）：自県の資源と世界遺産の価値に気付く小学校社会科・観光授業、『玉川大学教師教育リサーチセンター年報』第5号、pp. 33～44.
- 寺本潔・澤達大編著（2016）：『観光教育への招待』ミネルヴァ書房、全165p.
- 内川健・佐藤克士（2019）：持続可能な社会の形成者育成をめざす社会科観光学習—イングランド地理教育「単元事例案」を手がかりにして—、『サステナビリティ教育研究』第1号、pp. 13～26.
- 寺本潔（2019）：教職課程の学生にとってのESD教材の意味と授業活用、『玉川大学教師教育リサーチセンター年報』第9号、pp. 47～55.
- 佐藤克士・内川健（2020）：「観光のまなざし」論を組み込んだ社会科観光学習—小学校第5学年単元「人気観光地！京都伏見稲荷神社の人気の謎を探れ」の場合—、『サステナビリティ教育研究』第2号、pp. 13～23.
- 寺本潔（2020）：SDGsを探究する総合的学習と修学旅行指導への反映—熊本市立北部中学校の取り組みを事例として—、『玉川大学教師教育リサーチセンター年報』第10号、pp. 95～103.
- 井田仁康編著（2021）：『持続可能な社会に向けての教育カリキュラム—地理歴史科・公民科・社会科・理科・融合—』古今書院、全315p.
- 寺本潔（2021）：『地理認識の教育学—探検・地理区から防災・観光まで—』帝国書院、全136p.